



友の叫びは今も耳に

小清水光子（当時17歳、広島で被爆）
苦小牧市



8月6日、当時私は17歳。広島女学院専門学校経済科*1年に在学し、岩国より通学しておりました。その朝は晴天に恵まれ、抜けるような空の碧^{あお}さが広がっていました。

普段は学校で決められた黒の長袖の服を着て通学するのですが、この朝に限って、今思っても不思議な気持ちですが、半袖の薄紫のユニホームで登校しました。後になってみますと、黒の服でなかったから私は火傷から救われたのではないかと思います。広島駅一つ手前の横川を出て間もなく空襲^あに遭い、汽車が一時停止し、少し遅れて登校しました。この時の空襲が、原爆を落とす前の広島上空の下見だったということです。

学校ではすでに朝会が始まっていて、チャペル（朝会のこと）に出席する人と教室で待っている人に分かれました。私はチャペルに出席し、一番最後列の人となりました。従って講堂から出るのも一番早く、すでに廊下の折れ曲がった角まで来ていました（講堂の中の人々は鉄筋コンクリートの下敷きとなり、中に残っていた学友はほとんどが即死、焼死の状態でした）。その時、青赤いような稲妻のごとき閃光^{せんこう}が前を通り抜けました。「あ！何の光かしら」とそう言ったまでは覚えております。

気が付きましたら家屋の下敷きとなって、梁の下に倒れていました。「助けて、助けて」と泣き叫ぶ声が聞こえてきます。爆弾に直撃されたのかしら、一瞬そう思いました。私の横にいて、今まで元気だった友は梁の下敷きとなり、すでに亡くなり、その方の血を私は浴びていました。私自身も頭、ひじに傷を負っていました。

逃げなくてはいけない。真っ暗闇の中をもがきながらよじ登りました

経済科—1946年経済科廃止により、在學生は被服科に移籍

ら、屋根の外に出ることができました。講堂も校舎もペッシャンコとなり、すでに火の手があちらこちらから上がっておりました。講堂の方からの火の手は一段と大きくなっていました。教室に残っている友は校舎の下敷きとなって、机に挟まって、火の手が回って来ても逃げられず、生き地獄です。「助けて！助けて！」と助けを求める友を助けたくて努力しましたが、私の力ではびくとも動きません。奇跡的に助かって逃げて行く人に応援を求めましたが、友の体は机に挟まって抜けません。友は「私の足を切り落としてください。助けてください」。死の叫び声です。四方八方から火の手は次第に大きくなり、倒れている友に近づいて来ます。「足を切って助けて！」。必死の友の叫びは今も耳に残っています。私は友に「ごめんね。助けられなくてごめんね」。やっとこれだけ言えました。叫び続けていた友は一言の声も発せず、それっきり何も言わなくなりました。私は逃げるに逃げられず、必死に友を助けようとしていました。

ちょうどそこに、男の先生が走って来られました。私は必死で「先生、先生」と叫びました。先生は気付いてくださり、走って来られました。「先生、お友達が挟まっているの。助けてあげたいけど、足が抜けないの」。先生は「君は逃げなさい。早く」。その声に我に返って、私は先生に友を頼み逃げました。頭から指先まで血だらけの女の先生が倒れておられました。私は先生を助け起こし、一緒に浅野泉邸（縮景園）まで逃げました。泉邸はすでに人でいっぱいでしたが、何とか先生を座らせることができました。

泉邸は怪我をした人、焼けただれた人、すでにここに来て動けなくなった人、人、人。この世の地獄絵です。防火用水に頭を突っ込み死んでいる人、倒れてすでに死んでいる母親にすがりつく乳飲み子、焼けている電車の中に取り残されている人。転がっている死体を飛び越えて、やっと火の手のない川原にたどり着きました。近くに広島工兵隊*があり、そこで被爆した兵隊さんたちがゴロゴロと倒れていました。鉄カブトの所だけ髪が残り、あとは丸焼け。真っ黒くなって腫れ上がり、鉄カブト

工兵隊—^と渡河・交通・鉄道・通信などの技術兵部隊で、工兵第5連隊が白島にあった

の跡がなければ男女の区別もできないほどです。それでも生きていて、虫の息です。

ゴロゴロとした石や砂の上に倒れている人、人、人。すでに息絶えている人。川原はこれらの人でいっぱいです。やっと口のきける人は、自分の名前と住所を教えて「連絡してください。お願いします」と。何人かにこう頼まれました。必死な思いで自分を知らせる。こうした人たちのことを思い出し、忘れることができず、胸のふさがる気持ちでいっぱいです。発狂した兵隊さんが「お母さん、お母さん」「天皇陛下バンザイ」と叫びながら倒れてゆく姿をたくさん見ました。向かいの神社の老松がメラメラと燃え出し、対岸にいる人たちも熱さを覚えました。

細い声で「水、水」と求める人、焼けただれて手の皮が剥けてちょうどゴム手袋をはめておろ下げているような手の人など、平和な現在では想像もできない光景です。歩ける元気な方々と4、5人で川をさかのぼり、ひたすら逃げました。大きなカボチャ一つを抱いて逃げる人、牛を引いて町に向かって逃げる人、皆、気が変になっているのです。工兵隊の前を通りかかりますと、真っ黒く大の字になって焼け死んだ兵隊が道路にいっぱいいます。この方々に「ごめんなさい。ごめんなさい」と言いつつ、またいで通り越したのです。また、下肥^{しもごえ}*を入れる桶の中に、死んでいる2人の子どもを前後に1人ずつ入れて、天秤棒で担いで歩いているお母さんの姿もありました。

このように書けば数限りがありません。途中、救急所で傷の手当てを受け、一口の水も飲まず、少しでも遠くへと4、5時間歩きました。船に乗せていただき、川を渡り、途中で聞きました県立広島第一高等女学校*の寮にたどり着き、お世話になりました。畑に実っているキュウリをごちそうになりました。朝から何も口にしてない私たちにとって、このキュウリの甘さが喉にしみ、とてもおいしく大変うれしかったことを今もはっきりと覚えています。

2日後、皆と別れて岩国に帰るべく、教わった道を川に沿って一日中

下肥一人の糞尿を肥料としたもの

県立広島第一高等女学校一現在の県立広島皆実高等学校

歩き続けました。その川に人の死体が浮いて流れて行くのです。牛も流れて行きました。思考力も何もかもなくなっている私は、ただ呆然と眺めているだけでした。夕方、やっと横川駅にたどり着きました。ちょうど運良く、今日初めての被災列車が出ると聞き、乗せてもらいました。2両の列車、立ったままがやっとの状態で被爆者がいっぱいでした。これでやっと帰れると思った瞬間、気が遠くなり倒れてしまいました。しばらくすると外のホームで、倒れた人は外に出してくださいという大きな声が聞こえてきました。周りの人たちが「大丈夫ですか。起きられますか」と声を掛けてくださいました。それでやっと自分に気が付き、元に戻りました。

2時間かかって家に帰りました。家では仏さまにお灯明が立てられて、私の写真が飾ってありました。3日目になっても帰らないし、広島は全滅と聞いていたので、死んだのではと思ったそうです。私を見るなり母は「幽霊ではない。手もある、足もある。光子だ」と母や姉妹たちの喜びの顔。怪我こそしていても、生きて帰れたことの神様への感謝とさまざまな思いがこみ上げてきました。父はすでに私を探しに広島に出向いていました。



専門学校の廃墟（広島女学院歴史資料館提供）

何の話であれ、大抵実際より話の方が大きくなるものですが、原爆に限り、どんなにどんなに大きく言っても、現実の大きさ程には決して表現できません。言い換えれば、原爆は、無惨で恐ろしくて、どんな目的と理由があろうと決して許すことのできない、再び使ってはいけぬ恐ろしい凶器なのです。人の心も体も、すべての人類を、世界を滅ぼす原爆です。世界から絶滅しなくてはなりません。声を大にして世界に訴えなければなりません。

追伸

3ヵ月後、学校の跡に参りました。すべて灰となり、コンクリートの校門が一つ焼け残っておりました。4000度という火の玉によって一瞬のうちに亡くなりました多くの諸先生、お友達の方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

後日、私にも原爆症*が出て闘病生活を続けましたが、元気にならせていただき、現在に至っております。ありがとうございました。

(『被爆70年記念 平和を祈る人たちへ〈広島女学院同窓会被爆60周年証言集 改訂版〉』2015年8月)

原爆症—原子爆弾被爆によって生じた病症。急性障害は外傷・火傷のほか嘔吐・白血球減少・出血傾向・脱毛・貧血など放射能による障害が著しく、ケロイドや白内障が多発。後障害として白血病・種々の悪性腫瘍・発育障害・胎内被爆による小頭症、さまざまな健康障害があげられる。